

特集

「学ぶ」ことをたのしもう



11月1日から7日は「地域が育む『かごしまの教育』県民週間」。今年はコロナ禍による制限がかかる中での実施でしたが、曾於市内でもさまざまな催しが行われました。今回の市報では期間中に行われた交流や授業外での学習に焦点をあて、取材してきました。

「自己表現をまなぶ」

アンドモザイクス

岩南小学校 × & .mosaiques
(即興演劇集団)



**自分の考えたことを
表現してみよう**

私

は世界に一人、人生は一回だけのお芝居では他の

人になることができる。そんな言葉から始まった「演劇で学ぶ表現とコミュニケーション」のワークショップ。これは文化庁が主催する令和2年度文化芸術による子供育成総合事業（芸術家の派遣事業）として岩南小学校で初めてとなる取り組み。全児童21名がワークショップを体験しました。

「初めてのことは失敗が多く、それで嫌になってしまう。だけど伝えてみよう、やってみようという勇氣が大切です。今日は失敗を楽しんでください」

そう話すのは福岡県を中心に活動を行う即興演劇集団 & .mosaiques の吉柳佳代子さん。このワークショップの講師を務めました。

その内容は背中合わせで立ち上がる、「好き」の演技をする、ぬいぐるみにキャラを作って自己紹介をする…など様々。



あるワークショップでは、二人一組になってロボット役と指示役に。ロボットは寝転び、指示役は立ち上がらせるために命令します。ただ「立ち上がって」では動けず、「ひざを曲げて」「手をついて」など細かく指示を出さなければなりません。子どもたちはどう伝えたらいいか試行錯誤しながら、きちんと伝えることの難しさと大切さを学びました。

5年生の西留愛理さんは「初めて体験したことが多く、相手に伝わるように工夫して表現することが難しかった」と話しました。

「今後、進学したり社会に出たりした時に、人前で堂々と自分の意見を述べるコミュニケーション能力をつけてほしい。このワークショップでは自己表現力を伸ばす良いきっかけになりました」と中村俊一校長。今後も児童が本物に触れる機会や挑戦する機会を増やしていきたいと考えているそう。児童が自信を持って次のステップへ進むための「学び」が岩南小学校にありました。

「そば作りをまなぶ」 菅牟田小学校×地域住民



そば作りを通して

地域を学ぶ

秋

に白い小さな花を咲かせ
るそばは種をまいてから

約2カ月の早さで収穫できます。

そのため菅牟田校区では昔から
作付けされ、生活に欠かせないも
のでした。菅牟田小学校では地域
の歴史や暮らしを学ぶため30年以
上前から毎年そば作りを行って
います。

今でも菅牟田幸齢者学級や近隣
の農業団体など地域住民の指導の
下、3ヶの畑に全児童14名でそば
を作ります。

9月上旬。夏休みが明けるとす
ぐに種と肥料をまきますが、その
後も発芽や開花などそばの成長を
観察し、11月上旬に「そば刈り」
が行われます。

「そばの根元を刈って根っこと砂
は落としてください」

ポイントを教わると毎年そば作
りを行っている児童は慣れた様子
で鎌を使いそば刈りを始めました。
時には「鎌は危ないから振り回し
たらだめだよ」と上級生が下級生



に注意する場面も。

次になにをするのか、子どもたち同士でも話し、考えながら進めていきます。

そば刈りから一週間後には「そば実落とし」が。天日で乾燥させたそばを木の棒でたたいて実を落とし、交ざったごみの選別には風の力を利用する唐箕とうみが使われるなど昔ながらの方法で行います。

5年生の坂口慎弥くんは「2年生の時に転校してからそば作りをしています。前の学校になかったそば作りを地域の方々から教えてもらえて良い経験になります」と話し、そばの出来上がりを心待ちにしていました。

「そば作りを通して児童と地域の方々交流し、児童は地域の歴史や文化を学ぶことができます。児童にとって菅牟田校区のことを学ぶ、良い機会です」

と小磯竜一朗校長。地域との関わり大切さを教えてくれました。

菅牟田小学校にはそば作りを通して地域を学ぶ児童と、その成長を見守り続ける地域住民の姿がありました。

「国際交流からまなぶ」

岩北小学校 × ネパール人留学生
元日系社会青年海外協力隊



興味・関心を持つ きっかけとなる授業

この日、岩北小学校にはネパール人留学生と元日系社会青年海外協力隊の姿が。これは鹿児島県国際交流協会が国際理解教育の一環として講師を派遣するもので、2人は講師として岩北小学校に訪れました。

「国旗といえば長方形を思い浮かべますが、ネパールは世界で唯一、長方形じゃない形をしています。また、6つの季節があつて、首都カトマンズには8つの世界遺産があります」

ネパール人留学生のカンデル・ミトラ・プラサドさんが話すなかなか聞くことのないネパールのことを夢中で聞く岩北小学校の全児童11名。次の授業では元日系社会青年海外協力隊の下松裕和さんからブラジルの話が。日本語学校で2年間日本語を教えていた経験をもとに、ブラジルの学校には給食や掃除時間がないといった日本とブラジルの習慣の違いを紹介しました。



「岩北小学校の児童は元気があつて積極的ですが、地域外の人と交流する機会が少ないです。そこで外部の人を講師に招く授業を工夫して実施しています」

そう話すのは中山幸治教頭。岩北小学校では児童が視野を広げ、興味を持つきっかけとなる授業を年に10回程度行っているそう。これまで投資や植物など様々な分野の授業を実施しています。

授業を受けた5年生の山口竜ノ助くんは「ネパールの文化や祭りが盛んなこと、ブラジルに住む日系人のことなどを知ることができました。外国の人と話して、もっと世界のことを知ってみたいと思いました」と外国のことに興味を持った様子でした。

白井和彦校長は「現地の方から直接聞く話には説得力があります。授業をきっかけに世界のことを知ってほしい」と話しました。

学んだことをきっかけに児童が自ら興味関心をもって調べ、知りたい、やってみたいという気持ちを尊重する教育環境が岩北小学校にありました。

「未成年飲酒防止を伝える」曾於高校 保健委員会

曾於高校の生徒保健委員会は 2019 年度 20 歳未満飲酒防止教育学校コンクール 高等学校部門で最優秀賞を受賞！ 未成年の飲酒防止に関するリーフレットの配付など活動を行ってきましたが、より多くの市民の方へ啓発を行いたいとの想いを受け、今回市報へ掲載することになりました。



曾於高校生徒保健委員会 作成

**飲まない・飲ませない！
なく SO (曾於)！ U20 NON 飲酒！！
～焼酎王国・鹿児島県の Responsibility～**

中高生に聞いた！ 飲酒を経験した場合は？

- 1位 冠婚葬祭
 - 2位 家族と一緒の食事 という結果に！
- 【出典】厚生労働科学研究「未成年者の喫煙・飲酒状況に関する実態調査研究」(平成25年3月)

未成年がお酒を飲んではいけない理由

- ① 脳の健全な発達を妨げる
- ② 臓器障害を引き起こす
- ③ 性ホルモンのバランスを崩す
- ④ 少量でも急性アルコール中毒になる
- ⑤ アルコール依存症へのリスクが高まる

Q. お店や飲食店の人が20歳未満にお酒を売ったり、飲ませたりした場合は法律で罰せられることが決められていますが20歳未満がお酒を飲むことを親が止めなかった場合、罰せられるのでしょうか？

A. 罰せられます。

アルコールの害から20歳未満を守るための法律が「未成年者飲酒禁止法※」です。「20歳未満の飲酒を止めない親も罰を受けなければならぬ」と決められています。

※令和4年4月1日に法律改正され、「20歳未満の者の飲酒禁止に関する法律」に変更になります

ノンアルコール飲料について

曾於高校生へのアンケートで今年課題に取り上げているもの、それは「ノンアルコール飲料」です。

お酒に関しては多くの生徒が未成年での飲酒が禁止されていることを理解していましたが、ノンアルコール飲料については、全体の約52%の生徒が「ノンアルコールであれば未成年であっても飲んでいい」と回答していました。ノンアルコール飲料の缶にはどう記載してある？



このようにノンアルコール飲料の缶には「当商品は20歳以上の方の飲用を想定して開発しました」と記載されています。

なぜアルコールは含まれていないのに未成年が飲んだらいけないの？

本物のビールや酎ハイに非常に近い味になっているため、未成年が興味をもち、飲酒のきっかけになる危険性があります。

また、味に慣れ、実際飲酒をする際のお酒に対する抵抗が低くなり、初めてお酒を飲む際に抵抗なく飲めるようになってしまう可能性もあるのです。

酒税について～酒税って何？～

酒税は、酒に対してかかる税金のことを言います。酒税制度の歴史は古く、1371年(応安4年)に足利義満が酒屋に壺別200文を課税したのが最初と考えられています。2020年10月から酒税に変化が！ 発泡酒やビールなどでは、1L当たり20円減税、新ジャンルのお酒は1L当たり28円、ワインは10円の増税になりました。



「つながりを考える」
少年の主張大会

令和2年度第15回少年の主張大会に市内の小中学校から多数の作文の応募がありました。

厳正な審査の結果、最優秀賞および審査員特別賞に選ばれた方々を次のとおり紹介します。

応募された全文は、毎週土曜日の朝8時～8時30分にそおグッドFMの番組「サニサタ」内で紹介されます。

少年の主張大会各賞一覧
(敬称略)

【小学生の部】
最優秀賞

「二十年後も変わらず」

東迫美優 (中谷小6年)

【中学生の部】
最優秀賞

「前に進むきつかけ」

宮崎実子 (末吉中3年)

審査員特別賞

「一歩前へ」

宮ノ原紗弥 (大隅中2年)

小学生の部【最優秀賞】

「二十年後も変わらず」

中谷小6年 東迫 美優

私は、中谷が大好きです。なぜかという、まず、自然がいっぱいだからです。遠くに高千穂の峰を望み、目の前には緑の田畑が広がり、きれいな水が流れる溝ノ口川。そして、県の天然記念物に指定されている溝ノ口洞穴。これらが私の心をいやしてくれます。

次に、中谷の人達は、親切でとても優しいからです。みんなが私のことを名前前で呼んでくれます。母が、仕事で家にいない時も、外に出れば近所のおじさん、おばさんが声をかけてくれるので、さびしくありません。私はこんな中谷でずっと暮らせたらいいなあと思っています。だけど、中谷は住民の六割が、六十才を超えています。市役所で聞いて調べてみました。全住民は三百十三人。その中の六十代が五十七人、七十代が六十人、八十を超える人達が七十人とい

うことが分かりました。また、六才未満が十四人しかいないことも分かりました。このまま私

が大人になる十年後、中谷の人口はどうなっているのでしょうか。二十年後、中谷小学校は存在するのでしょうか。とても心配です。

このように、若者が少なく高齢者が多い中谷なのに、高齢者の人達が暮らすには不便な地域です。一体、高齢者の方達は、何が良くて、中谷に住み続けているのでしょうか。不思議に思ったので、近所の長谷川さんになぞねてみました。

長谷川さんは、二十才を超えてから中谷に住み、六十年以上もここで暮らしています。

「おじさんは、中谷の自然が大好きだなあ。近くに流れる川も清らかにすんでいて、昔から変わらん。人も温かい。」

と、目を細めて話してくれました。でも、

「病院や買い物に行くのが大変だなあ。今はまだ、車を運転するけど、昔はバスもいたんだけど。」

近くに七件も店があったんだけどなあ。」

話を進める内に、さびしそうな表情になる長谷川さん。

中谷に病院や店ができるのが一番いいのですが、無理だと思ふので…。わたしは、考えました。六十代以上の高齢者六割を五十代以下の四割の人で支えない。そんな仕組みを考えていくしかない。そんな中谷には思いつきませんが、まず次の二つの事から始めたいと思います。

一つ目は、近所の高齢者を知ること。時々、さびしくないように声をかけます。二つ目は、母と買い物に行くとき、近所の高齢の方に、「何か買い物ありますか。」と声をかけ、お手伝いすること。この二つは、学級の友達にも協力してもらいたいと思っています。

わたしの大好きな中谷が、ずっと集落として存在するように。十年後、二十年後も変わらない、中谷であるように。

中学生の部【最優秀賞】

「前に進むきっかけ」

末吉中学校3年 宮崎 実子

皆さんは、自分のコミュニケーションの仕方について考えてみたことはありますか。

私は、小さい頃から人と話すことが苦手でした。誰かに話しかけられても、目を合わすこともできないし、出された話題に対して話を続けることも本当に苦手でした。そんなとき前々から楽しそうだと思っていたミュージカルの習い事を始めました。すると、演技や歌を通してなら恥ずかしがらずに人前で発表することができました。その日から、もともと決められた内容なら自分なりに感情をこめて表現することができるといふことに気が付き、中学校に入って、放送係での活動を始めたり、文化祭などで役者に挑戦するようになり

ました。

例えば、一年生の文化祭では、学年全員で「山下清」さんという人が主人公の劇をつくり上げ、さ

くらという女子高校生の役を演じました。コミュニケーションが苦手な私でも、この役を通して、母とのすれ違いで、素直な心を閉ざしてしまった複雑な女子高生の想いを伝えることができたように思います。他にも、地域で公演されたミュージカルに参加したときは、練習は、もちろんのこと、仲間たちとたくさんコミュニケーションをとることで、一つの大きな作品を作り上げることができました。その中で少しずつ、まわりとのコミュニケーションがとれるようになり、以前より会話の中で自分の気持ちを素直に話せるようになりました。人と関わるのが苦手な私にとって何かの舞台に立つて発表したり演技をすることは、私なりのコミュニケーションだと思っています。

しかし、日常では、そう上手くいかないもの。私は、未だに人と話すことが苦手で、相手の目を見て話せなかったり、下を向いて歩くことが多いです。自分の行動を

ふり返って見たときに、相手に勘違いをさせるようなことをしているのではないかと思うことが、よくあります。

けれど、こんな私も少しずつ前に進んでいます。そのあかしが、一学期に行われた弁論大会です。私は、弁論大会でクラスの代表として発表する機会をいただきました。しかし、いざ、自分の意見を大勢の人の前で発表するとなると、本当に緊張しました。しかし、苦手なものにも関わらず、人前に立つことが過去にも多くありました。そのたびに、できないという気持ちと、やりたいという気持ちに揺れた記憶があります。ですが、過去の記憶の中で、不安だったことよりも、やり遂げたという達成感の方が強く、この発表も、自分自身の成長につながっている気がします。発表を終え、たくさん感想をいただいた中に、自分同様コミュニケーションに対する悩みをもっている人がいることが分かり、一人じゃないと、さらに前に進む

勇気ももらいました。

もしかしたら、私の他にも、私と同じ様なコミュニケーションに対する悩みをもっている人がいるかもしれません。確かに、苦手なことを克服するということは、容易ではありません。たくさん悩んでしようし、苦しいことでしょう。そういう人たちのためにも、私は伝えたいです。自分なりに、人の関わり方を見つけけるきっかけを探していくことの大切さを。そして、そのきっかけをつかんで、勇気を出して前へ進むということ。これから先、人とのコミュニケーションが問われる社会で、しっかりと自分という存在を知ってもらうために、苦手から前へ進むきっかけを作っていきたいです。私体が験したように、人との輪を広げていくことは、きっと、豊かで楽しいの多い人生を送ることにもつながるでしょう。

苦手から、もう一歩、勇気をもつて踏み出してみるの、今かも知れませんが。

特集

「学ぶ」ことをたのしもう

中学生の部【審査員特別賞】

「一步前へ」

大隅中学校2年 宮ノ原紗弥

一年前の春、新調したばかりの制服に身を包み、新しくスタートする学校生活に期待と不安を抱えた少年たちがいました。私も、その中の一人でした。

「中学校生活を友達と有意義なものにしたい。」

私は張り切っていました。でも、その気持ちが強すぎたのか、楽しいはずだった学校生活を台無しにしてしまったのです。

私はどちらかといえば人見知りな性格で、部活動などにも所属していなかったため、交友関係はとてもしなかった。友人は不安もありましたが、私には、保育園からずっと仲の良い「親友」と呼べる友達がいました。中学校でも同じクラスになり、その子がいればそれで十分だと思っていました。でも、これは私一人が感じていたことで、親友もそうだったわけではありま

せん。

親友は親友で新しく交友関係を広げ、特別仲の良さそうな友達もできていました。それに彼女はクラスの中心的人物で、みんなからも慕われており、引っ込み思案な私には、なんだか遠く感じられるようになりました。

それから親友は、私よりその新しい友人という方がだんだん長くなり、楽しそうにしている姿をみかけると、少し複雑な気持ちになりました。そして、たった数ヶ月前のことなのに、小学校時代、お互いのクラスを歩き来しては他愛もないことで笑い合っていたことや、毎日のように楽しく遊んだことが懐かしく思いだされ、同時に、その思い出がどんどん消えていくような気がして、悲しくなりました。

それから私は親友から離れ、一緒に行動することも、必要以上の話をするともなくなっていきました。ただのクラスメイトに戻ってしまったのです。自分からなかなか打ち解ける

このできない私は、それからほとんど一人で過ごすようになりました。一人の時間は苦痛で、そんな時に楽しそうな彼女の姿を見かけると、うらやましさの中に、怒りのような気持ちすらわいてきました。でも、それは、自分自身にも向けられました。私は私が嫌になる。私のこの臆病で、人をうらやむことしかできない心が。

しかし、中学校生活を振り返って後悔はしたくない。私を変えられるのは私だけ。過去はかえることができなくても、未来は変えることができる。そう自分を奮い立たせ、勇気を持って私は一歩前進しました。

中学二年生になりました。新しく同じクラスになった人もたくさんいます。そして、親友だった彼女もいます。

「新しく始めよう！」

そう決意して、少し積極的になった私には、新しい友だちができました。そして、毎日を楽しく過ごしています。それに、自分

でいうのもおかしいですが、明るくなってきたと思います。少し距離を感じていた彼女とも、しだいに自然と話を出来るようになってきました。そして、また一緒に笑えるようになってきました。それがとてもうれしいのです。

私は、これまで一人で勝手に思いこんで、おまけに言葉足らずだったのかもしれない。そう思うようになりました。自分の気持ちを隠して消極的になり、友達が自分の思うようにならなくなることだけを期待していたのかも知れません。友達を作らって簡単なようで難しい。でも、考え方を変えてみれば、案外うまくいくのかもしれない。「親友」がなんなのかもわからなくなってきましたが、でも、わたしはまた一から、彼女や新しくできた友人と時には落ち込んだりしながら、後悔のない中学校生活を送っていききたいと思えます。

特集 「学ぶ」ことをたのしもう